

アッシジの聖フランシスコ（4）

はじめに

聖フランシスコの伝記は全世界で数限りない出版がされていますが、私の入手できる範囲で読み比べをして今年29日にベラルド・ロッシ著が届きました。書き方が私の手法と同じ年代史になって親しみを覚えています。来月もう一回まとめと今までの仮説の修正の参考になります。今月号は専ら古典的な価値のあるイエンス・ヨハンネス・ヨルゲンセン著からの引用で1213年から1226年のフランシスコの召天までを追っています

重複になりますが、もう一度13世紀初めのイタリアの政治情勢を復習します。

イタリアに限ったことではありませんが、

「覇権争いは非常に過酷であり、復讐のメカニズムが街の通りや広場を内戦特有の空気で重苦しく覆っていた」

とあるように同じ街に住む人々に対立の要素が持ち込まれていました。それは4重の円を画いています。①第一の円は都市の内乱でみられる紛争で、門閥間の争いとマヨールスとミノールスの対立です。②この対立は近隣都市間の封土（領地）の支配をめぐる争われる衝突（経済戦争）と関連します。③この二つの対立をより複雑にしたのが当時の神聖ローマ帝国とローマ教皇との戦いでした。アッシジはプロバンス地方との経済取引が活発になり商人（ミノールス）が力をつけ帝国から自治を取り戻すべく12世紀後半から争いを始めていました（1198年）ミノールスの台頭に脅威を感じたマヨールスは帝国派になり（現状維持、保守派）、ミノールスは教皇派にならざるを得ません。このようにして外国との戦いが内戦を引き起こします。アッシジではミノールスの力が強かったために、マヨールスであるアッシジの貴族たちは皇帝派の都市である隣のペルージャに助けを求め避難をします。ペルージャは皇帝派であったので避難を受け入れ、時を待ってアッシジと戦い復讐することが狙いでした。こうして1199年アッシジとペルージャが戦うことになりました。イタリア半島はこのようにして神聖ローマ帝国派とローマ教皇派が縞模様に対立する構図がつくり出されていました。ここまではキリスト教国同士の戦いですが、④国際的には十字軍の派遣によってキリスト教国とイスラム教国との戦いが1096年から始まっており1270年迄の8回も無謀且つ無益な争いが続きました。聖フランシ

スコも聖クララもこのような戦火の中から平和を叫んでいたのです。フランシスコが第5次（1217年～1221年）にある目的をもって加わりました。

十字軍に加わるときは国内の敵同士が仲間になり新たな敵を作り出して戦いが始まります。戦いは敵を必要とします。敵があるから戦うのではなく戦いたいという人間の欲望が敵を必要とするのです。戦いたいという人間の欲望は「相手から軽視された、無視された」というデスカウントから芽生えて最後は復讐心にまで育ち上がります。

このような情勢の中で、成り上がりの放蕩息子が突然、すべての財産を放棄して、家々を訪問し「あなたの家に平和がありますように」と告げ始めたのですから人々は驚き、呆れかえり、バカにしていたのですが平和を求める潜在的な同調者は多くいて弟子が増え、財産を寄付する者が増え始めます。そればかりでなくローマ教皇側にも賛同者が現れます。そのような動きを見ていきます。

1213年の出来事

その年の春からフランシスコは説教権を認可してもらいロマーニャ州で説教をはじめた。5月8日オルランド・ディ・カッターニー伯爵からラ・ヴェルナ山にある土地の一角を寄進される。ラ・ヴェルナはアレツツオから車で15分位フォレステ・カゼンティネジ国立公園内にある。静寂で、祈りにふさわしい場所である。そして何よりも特筆しなければならないのはここで1225年9月14日フランシスコが聖痕を受けるのである。

1214年の出来事

1213年の冬から1214年にかけてスペインを経由してモロッコの回教徒に福音を宣べ伝えるべく出発したが、途中で大病にかかり（肺結核）引き返した。彼は生来、体は弱く子どもの頃はよく熱をだして母親の手厚い看病を受けていた。その上「清貧」を目指して断食、托鉢による食生活、岩穴での睡眠等で肉体的な栄養状態は悪かった。これは終生続く修練でもあった。

この年、チェラノのトマスが弟子に加わった。彼は聖フランシスコの第一伝記、第二伝記を書いた人物である。

1215年の出来事

(1)クララ達の「清貧の特権」の許可を願った。

1215年ローマに向かい、第4回ラテラノ公会議（11月11日から30日迄）に出席、教皇イノセントにクララ達の「清貧の特権」の許可を願った。

清貧の特権とは？

「フランシスコのように生きる生活様式を認めること。即ち、福音に従って生活すること。清貧と労働と祈りに生きること。姉妹たちは財産を貧者に施した後は、サン・ダミアノでは再びどんな財産も、自分の手でも、人を介してでも、受け取ることは出来ない。唯一の例外は、修道院が俗界から離れているのに必要なだけの、周囲の土地のついた修道院だけである。但し、この土地は、姉妹たちの必要を充たす菜園として耕された」

この特権はイノセント 3 世から認可されたが、彼が翌年召天するとその後の教皇はしばしばクララに最低の土地と財産を持つように働きかけた。クララはこの会則の厳守を貫きいかなる妥協も追従も排除する努力をしていた。

彼女が自らの手でこの原則的な会則の認可を教皇から承認されたのはクララの召天の二日前であった。

(2)ドミニコ会の創設者ドミニコ・グスマンと出会う。

この出会いについて100年後ダンテは「神曲」の天国篇第11番で次のような描写をしている。

「セラフィムのように愛に燃えていたのはフランシスコであり、ケルビムのように智慧に耀いていたのがドミニコだった。しかし二人とも自分たちの業を同じ目的に向けたとき、一人の賞賛は、もう一人への賞賛となった」

1216年の出来事

(1)ウゴリーノ枢機卿が訪れる

オステアのウゴリーノ枢機卿はフランシスコの聖性と人間的魅力に惹かれ始めて「小さき兄弟たち」を訪れ、その活動に好意を示し後にこの修道会の恩人となる。フランシスコも「自分の靈魂がウゴリーノ枢機卿の靈魂と溶け合っていると感じた」

(チェラノ第一伝記) ウゴリーノはイノセント 3 世の甥にあたり、後に1227年から教皇グレゴリオ9世となる人

「小さき兄弟たち」正確には「より小さき兄弟たち」の会は「原始会則」に基づき1210年イノセント 3 世の口頭承認によって認められた会、会員は12名であった

「より小さい」とは人数が少ないからではなく「謙虚に生きる」という意味

「兄弟たち」という表現は「神の前においてはすべて兄弟であるというイエス・キリストの教えからきている。

「あなたがたは先生と呼ばれてはならない。あなたがたの師は一人だけで、あとは皆兄弟なのだ」(マタイによる福音書 23 章⑧) フランシスコは弟子を兄弟と呼んでいる。司祭が弟子になったとき彼は聖餐を弟子の司祭から受けている。フランシスコには制度上の聖職者の資格はなかった。彼はこれを素直に認め通例の規則に従っている。「小さきもの」のを率先している。

本稿では兄弟を弟子と表記することにします。

(2)イノセント 3 世がペルージャで急逝する。

フランシスコは臨終に立ち会った。

イノセント 3 世はフランシスコのよき理解者であり、いつの頃からか「フランシスコ会の父」と呼ばれている（ベラルド・ロッシ著p135)

新しい教皇にはホノリウス 3 世が選ばれた

1217年の出来事

(1)修道会総会の始まり

弟子たちの数が増え、活動が広範囲になり、小さき兄弟会は発展するにともなって、「平和の宣教」を伝えるために、アルプスを越えヨーロッパ、イベリア半島、イギリス、更にチュニジア、シリア、モロッコ、エジプトへと出かけることになる。その他各地でも弟子が増えた。それはフランシスコの考えも及ばないほどであった。情報不足のために多くの失敗が繰り返されたがその反省と学びが組織化という道をたどる。

伝道地域の拡大は地方別に管区に分けられ、各管区には管区長がおかれ、さまざまな規程が必要になる。情報の交換も必須である。フランシスコは年2回聖霊降臨祭（春）と聖ミカエルの祝日（9月29日）ポルチウンクラで修道会総会を開くことにした。

互いの教化の為に集まった兄弟たちは「いかに会則をよく守るべきかを論じ合った」「彼らは旅に袋もカバンも持たず、パンも金もたずさえず、靴も履かない、修道院も教会も畑やぶどう畑や家畜や家や財産や、頭をのせるべきもののさえ持たない。毛皮も亜麻布も着ず、頭巾のついた毛の僧衣だけをつけ、マントもえりも上着も別の衣類も身につけない。食事に招かれれば、出されたものを食べる。施しを受けても、次の日の為に蓄えない。ことばだけでなく、聖い生活と完全な行状によって、あらゆる身分の人々を動かして、世を軽んじさせ、家庭も大きい財産も捨てさせて、そまつな僧衣を縄という小さい兄弟たちの修道服を着させる」

原始会則の確認をした後でフランシスコの説教があった。

「すべてを捨てない人は、私の弟子になれない」「他人に平和をもたらすために行くあなたがたは、いつも心に平和を持ちなさい」という彼の原則を徹底した趣旨の説教を詩人のように語った。

「愛と智慧のある所には恐れも無知もない。忍耐を謙遜のある所には不安も怒りもない。貧しさと喜びのあるところには欲もけちもない。落ち着きと思慮深さのある

所には心配も動揺もない。主への恐れが入り口を守る所には悪い敵は入れられない。
慈悲と賢明のある所にはぜいたくも無情もない」

ようこそ、女王なる智慧よ

主がお前とお前の姉妹、聖く純な無邪気をお守りくださるように！

清い貴婦人清貧よ、主がお前とお前の姉妹、聖い謙遜をお守りくださるように！

聖い貴婦人愛よ、主がお前とお前の姉妹、聖い従順をお守りくださるように！

すべてのいと聖い徳よ、主に由来するお前たちを、主がお守りくださるように！

聖い智慧よ、悪魔とそのあらゆる悪事を赤面させよ！

聖く純なる無邪気よ、この世のあらゆる賢さと肉の賢さを赤面させよ！

聖い清貧よ、あらゆる欲望と貪欲とこの世の憂いを滅ぼせ

聖い謙遜よ、あらゆる高慢と世俗の人の俗事を赤面させよ！

聖い愛よ、あらゆる悪魔と肉の誘惑、あらゆる肉の恐れを滅ぼせ

聖い従順よ、肉体のあらゆる欲求を滅ぼし、肉体を精神に服従させ、人間が地上の
あらゆる人間に仕え、人間だけでなく、おとなしい獣にも仕えられるようにせよ」

註：「貴婦人清貧」「貴婦人愛」はフランシスコ流の擬人法で「清貧」を貴婦人と呼んでいる。清貧
が彼をキリストのもとへ導く者とみなし、貴婦人清貧に深い尊敬と忠誠を示す騎士道精神の現れ
である

ベラルド・ロッシも以下のように記している

「フランシスコ会の初期に資料によれば「貧しさ」とは「キリストの花嫁」のことであり、雅歌
(旧約聖書)に出てくる「おとめ」のことです。謙遜な僕フランシスコはその「おとめ」に仕えま
した。なぜなら、キリストの花嫁に仕えることで、霊的騎士が示せる最上の表現と考えたからで
す」(p140)

(2) 教皇の支援

然し原始会則では大きくなった組織を統率することができなくなったフランシスコ
は5月と12月の2回ホノリウス3世を訪問してウゴリーノ枢機卿をフランシス
コ会の特別保護者（自分たちの父）になってもらった。このことにより海外宣教が
支障なく進むようになる。理念はフランシスコから発しウゴリーノ枢機卿によって
組織的に運営されフランシスコ会が継承されていった。

5月の総会でフランシスコ会最初の11管区が設立された。イタリア国内に6、国外
に5、スペイン、フランス、ドイツ、クロアチアとハンガリー、パレスチナであっ
た

1218年の出来事

1218年には兄弟エリアを団長としてエルサレムへ送り、シリアとパレスチナとの
接触に成功し管区を創設し、アナトリア、ギリシャ、クレタ、キプロスへと宣教活

動を広めた。ここでエリアはドイツ人最初の弟子を得た。（その名はシュバイアーのツェザリウス、博学で方々へ旅をした聖職者、組織を神学的に指導した人物）

1219年の出来事

(1)中東への宣教に出る

1219年の春の修道会総会で2年前の失敗の反省の上に立って、再び海外宣教が上った。この出発に先立ってウゴリーノ枢機卿が海外各地の司教座に紹介状を送ってくれた。この時6人からなるモロッコ伝道があった。その目的はサラセン人たちに宣教することで、一人は途中で病になり離脱したが5人はモロッコへの途中セビリアに着いて回教寺院で説教を始めた為に投獄されたが、モロッコにいたミラモリン（当時はアブー・ヤクブ）は寛大に処し帰郷させようとしたが5人は再びモロッコへ舞い戻り、説教を始めたため、諸手続を経てから5人は殉教した。1220年1月16日であった。

フランシスコもカッターニーを伴って1219年6月24日第5回十字軍の船に乗ってアンコーナを出港し聖地へ向かっていた。一ヶ月の船旅の後、今のアッコ（イスラエル・テルアビブの近く）に着きエリアの出迎えを受け、合流してエジプトのダミエッタに向かった。目的は異教の前に立って、神のことは宣べ伝えること。話合いによる和平を進めることであった。

然し加わった十字軍は極度に頹廃堕落しており、その精神を正すためにフランシスコは多くの説教をしなければならなかった。内部の精神的なケアをしながらもフランシスコは長年の夢「異教徒に宣教すること」をあきらめず、8月中旬にエジプトに到着した。9月、講和談判の機会を利用してスルタンに会う算段をしていた。神の摂理によってエジプトのナイル川のほとりで回教徒のメレク・エル・カメルと出会った。

ダミエッタに到着後もあらあらしい対応にもめげず「スルタン、スルタン」と連呼し面会にこぎつけた。そしてスルタンに説教をした。これはジョットによって描かれた絵として有名である（有名な話・割愛）

スルタンは彼の説教を悪くは取らず「どの信仰が神のお気に召すかを神がわたしにお示しくださるようわたしのために祈ってくれ！」とってこの大胆な福音宣教者を退却させた。

(2)スルタンとの会談に意義

13世紀のヨーロッパは対話の時代ではなかった。争いと対立の時代であった（冒頭記載）この時代に異教のスルタンと話合いによって問題を平和のうちに武器によらず解決できるとフランシスコは考えたのであろう。彼の十字軍参加の目的は戦いではなく対話への挑戦であった。然し彼の失望と傷心は深まった。

ダミエッタが11月5日陥落し十字軍による残虐な奪略が始まり、フランシスコは落胆と恐怖と嫌悪に満ちてそこを立ち去りエルサレムに向かった。

(3)ベトレヘムでの降誕祭

エジプトから船にのりハイファに着きティベリア湖を周り、エルサレムからベトレヘムへの道程であった。12月24日の降誕祭をベトレヘムで祝い、その光景に感嘆したフランシスコはそのやり方を後にアッシジに戻って再現することになる。

又、ゴルゴダの丘にひざまずいてイエスの痛みと苦しみを感じながら熱心な祈りを捧げた。滞在は翌年の夏頃迄と考えられるがこの間にエジプトでかかった眼病が思わしくなく、結核性マラリアによる熱に侵され肉体は極度に衰弱をしていた。イタリアでは回教徒に捕まったとか溺死したとか殉教したとか変な噂が流布して、組織運営に亀裂が生じたとの知らせを受けて急いで帰国した。

(4)学問と信仰に葛藤

1219年彼の弟子の一人がフランシスコ会のための学舎を造った。フランシスコは猛反対であった。（この年ドミニコ会がボローニアに神学校を造っている）フランシスコは学がなくても「悔い改め」れば誰でも救われるという信念を生涯貫いた。反面フランシスコが歴史の名を残したのは彼が反対した人達が造った学校や修道院であった。弟子たちは教えには忠実に組織を造るように心がけた。これも偉業である。師の反対に屈していればカリスマ一代の活動で終わっていたと想像できる。

1200年前半にヨーロッパで17校の大学ができた。（パリ、ボローニャオックスフォードは既設）その内8校がイタリアにできた。パドヴァ、ローマ、アレッツォ、ナポリ等）当時は学問を求めた時代の先駆けであった

1220年の出来事

(1)1220年1月16日モロッコで5人の弟子が殉教する

(2)フランシスコの辞任

1220年9月22日フランシスコの組織を支援するためにウゴリーノ枢機卿が動きホノリウス3世に「大勅書」（1223年11月認可）を願いで「会則」に従わない者は兄弟会から閉め出された。

9月29日フランシスコは眼病の悪化と組織化を嫌って指導者としての地位を辞任して弟子ピエトロ・カッタニーに任せた。然しフランシスコへの尊敬と敬意は高揚した。

1221年の出来事

(1)1221年春「^{むしろ}筵の総集会」が開催された。

兄弟全員が参加できるものとしては最後の集会となり、4～5千人が集合した。大勢の人を滞在させる場所はなく畑に筵を敷いて集会が行われたのでこの名前がついた。修道会が発展するにつれて、「会則」も細かく広範囲にならざるを得ない。1210年の簡単な規則、「福音的生活法」だけでは組織の統率がとれなくなった。会則は時代と共に少しずつ変化をとげ2年間をかけて「1221年の会則」（勅書によって裁可されない会則）が完成するにいたった。それは「祈り、讃歌。感謝」のことで満ちている。聖書の教えに従順に書かれているが特徴的なことは「悔い改めの勧め」と言える。その一例を示すと次のような文がある。多くの省略を恐れず引用します。

「わたしたち哀れな罪びとは、聖名を呼ぶに値しませんから、心からお願いしたいのは—————へりくだってお願いいたします。」

「小さい兄弟、役に立たない僕であるわたしたちは、へりくだって切願いたします。（あらゆる職業・人々が列挙されているが割愛）あらゆる民族、種族と言語、現在と未来のあらゆる国民と人、これらの人々が真の信仰を改宗にいつまでもとどまりますように。

わたしたちすべてに胸の底から、心から、真情を傾けて、
わたしたちの全能力をあげて、
わたしたちの全理性の能力をあげて、
わたしたちのあらゆる努力を尽くして、
わたしたちのあらゆる愛を傾けて、
わたしたちのあらゆる志望と意志をもって、
わたしたちの主なる神を愛させてください

主なる神はわたしたちすべてに肉体と精神と生活のすべてを、過去も今も与えられ、わたしたちを創り救われ、清い慈しみからわたしたちをたすけようとおぼしめされ、惨めで墮落し、むさくしく忘恩で悪い宿なしに、あらゆる良いものをくださり、今も毎日くださっているからです。

わたしたちにどこまでも、いつなんどきでも、毎日たえず、本当にへりくだって、神を信じ、心に留めさせてください。

1221年フランシスコの希望によりドイツに宣教師が派遣された。

(2)1221年12月16日ファエンツァの争いが起こる。

ファエンツァ市長がことの一大事に「贖罪の兄弟」に武器を取ることを命じたが彼らはそれを拒否した。市長が罰則を科そうとするとホノリウス3世が「贖罪の兄弟」の人たちを守るために各都市の文書を送り彼らを保護した。

(教皇ホノリウス3世の腹心がウゴリーノ枢機卿、後のグレゴリウス9世フランシスコはこの二人を恩人といっている)

(3)「贖罪の兄弟」とは「第三会員」とも呼ばれている。

フランシスコ修道会に入会できない市民たちでフランシスコの生き方に賛同するものは誰でも入会できた。「すべて兄弟である」とのフランシスコの理念が反映されている。

第一会員は財産を処分して貧民に施し裸になって入門する男子。

第二会はクララが最初の人で男子同様に自らの財産を処分して修道院内で祈り且つ働くという女子の会。

第三回とは在家の市民たちでフランシスコの使徒的生活と信仰を同じくする者、1212年にフランシスコがローマで出会ったジャコモ夫人、1213年にラ・ヴェルナの土地を寄進したオルランド・ディ・カッターニー伯爵等がその結成に貢献したと言われるからそのころから自然発生的に輪が広がっていたようである。

この(2)事件を契機にウゴリーノ枢機卿は各地のばらばらの「贖罪の兄弟」を組織化することを試み「会則」を作成した。

「贖罪の兄弟」の規則は概ね下記のようなもの

- ①彼らは世の中にあり、世を捨ててはならない。
- ②兄弟会に入るとすぐ負う義務は、不正に得た富をすべて返すこと（放棄すること）
- ③教会へ10分の1税を納めること。
- ④遺産相続の争いを避けるため入会后3ヶ月以内遺言書を書くこと
- ⑤緊急の場合のほかは誓いをしないこと、
- ⑥武器を携えぬこと、
- ⑦公職につかないこと。
- ⑧特別のみすばらしい服装をし、
- ⑨祈りと愛の業につとめなければならぬ
- ⑩互いに平和にすべき

このようにして「第三会員」会が創立された。

1222年の出来事

1222年学研派の代表エリアはフランシスコの会則を、学問を広める会則に改めようとウゴリーノ枢機卿に働きかけたが、フランシスコは「知識は高慢にするが、愛は信心深くする」と使徒のことばで反論している。彼が心底嫌っていたのは、学問を鼻にかけること、学問を自慢のたねにする利己主義だった。有名人だという空しい誇りに胸をふくらませ、大聖堂の説教壇に立つよりは、高い山の岩穴か庵でひざまずいて、人知れず孤独のうちに同胞のために神に祈るのが、ずっとよいことを彼は感じていた。ことばや理屈でなく、祈りと生活（実践）を重ねた終生変わらない信念であったが、次第に弟子の考えを受け入れるようになり、ボローニア大学で

神学を教える弟子も現れた一方でフランシスコもボローニャの街角で「無学な者」の説教を続けた。大学の街での無学な者の説教に少なからずの人々が驚いた。説教の内容は不和を和解させ、平和をつくることだった。「衣は汚く、姿はみすぼらしく、顔立ちは良くなかった。だが、神が彼のことばに大きい力を与えたもうたので、争って血を流していた多くの貴族たちは、感動して仲直りをした。男女を問わず皆が彼を敬い、彼に帰依したので、彼の方へ群れをなしておしかけ、衣の端でもちぎり取り、衣の裾にでも触れようとした」

1223年の出来事

(1)1223年勅書によって裁可された会則の認可

1210年にローマ教皇による「口頭の裁可」から弟子が増えるに従って会則は現実に対応出来るように変化していった。フランシスコが師と仰ぐウゴリーノ枢機卿の助言や側近の弟子たちの意見を入れて原始会則は緩やかに変更された。その中でも学問知識への道、学舎の建設、聖堂の建造はフランシスコには気が進まないことが多かったが、原始会則も形を留めて継承されている（フランシスコの神学的要素については素人のわたしには論じられない）

- ①序文、「従順と清貧と貞潔において福音に従って生きる」義務
- ②金銭を受け、何かを所有することへの厳しい禁止
- ③恥じずに施しを乞う掟（日常生活を支えるために与えられるものは頂く）
- ④質素な服装をし、麻の粗布や他の布きれでつぎはぎをしてもよい
- ⑤旅をするときは、兄弟たちは誰に対しても穏和で、平和を好み、控えめで、謙遜でなければならない。互いに争ってはならず、だれも裁いてはならない。
- ⑥家に入るときには「平和がこの家にありますように」と挨拶をし、福音のことばにしたがって、出されたものは食べてもよい。
- ⑦土地の司教が反対したら、説教をしてはならない。聖職者への従順はフランシスコの最初からの姿勢であった。
- ⑧女子修道院に入ったはならない。
- ⑨フランシスコ会の司祭はローマ・カトリック教会の習慣に従って聖務日課の祈りをし、修道士は「主の祈り」を唱える
- ⑩字の読めない者は、読み方を習ったりせず、なにより大事なものは、あらゆる高慢、虚栄、ねたみ、非難、不平、貪欲、この世の憂いをまぬがれ、主の霊をもち、神のみ業をなし、常に清い心で祈り、迫害や病いにおいて謙遜と忍耐を保ち、わたしたちを憎み非難し正しく導く人を愛することである「あなたがたの敵を愛し、あなたがたを迫害し非難する人のために祈りなさい。義のために迫害される人は、幸いである。天国は彼らのものだから。最後まで我慢する人は救われる。

この会則は「解釈せずに、解釈なしに」従うことが伝統的に継承されている。この掟は「生命の書、救いの希望、福音の核心、十字架の道、完全の立場、天国への鍵、永遠の生命の予感と担保」だった。p286

(2) グレッチオで降誕祭

この冬、グレッチオで降誕祭をベトレヘムで見た（1219年）方法で祝いたいと計画した。「わたしは一度是非真剣に神の御子のご降誕を、自分のこの眼で、どんなに御子がわたしたちのために貧しくみじめになることをのぞまれたかを見てみたい」といいグレッチオの「修道院の側の森に岩穴が一つあります。そこに干し草をいっぱい詰めたかいばおけを置いてください」と命じた。

フランシスコの清貧の思いの原風景を具体的に見て感じとり、弟子たちにも見せたかったのであろう。ヨーロッパの教会では今日でも忠実に行われている。その最初の発案者であった。フランシスコはできるだけ「福音に従って生きる」という信条を更に強固にしていった。

1224年の出来事

1224年から始まる最晩年の大部分をリエティの谷で過ごし始める。この谷はフランシスコの最初の布教の旅の舞台であった。肉体は弱っていた。特にエジプトに行ったとき眼病（トラコーマ）にかかり、時には殆ど見えなくなった。

その治療に灼熱した鉄でこめかみを焼くという粗療法も受けている。（後述）

フランシスコはもともと頑強な体質ではなかった。子どもの頃にはよく熱をだしている。その後の長い断食、少しの睡眠をむき出しの岩が寝床であった。岩穴を好んで選んだのはイエスのことばの実践であった。

「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない」（マタイによる福音書8章20）枕は石か木であった。しばしば座ったまま眠る。こんなふうには20年も過ごしてきたので肉体は弱くなっていた。血を吐いてもう駄目かと弟子たちに思われたことが何度かあった。。このようになった自分を「老衰した男」と呼んだ。然し、人々を天国に導こうとする情熱は冷めやまなかった。

聖霊降臨祭の定例の総会では人前では話が出来なかったので

兄弟たち（弟子）に手紙を書いて奨励をしている。

「あなたがたの小さな僕であるこの兄弟フランシスコは、神ご自身である愛において、またあなたがたの足を接吻する心で、あなたがたにせつにお願いしたいのは、あなたがたが謙遜と愛をもって、わたしたちの主イエスキリストのみことばをどれも受け入れ、実行し、それに完全に従うことです。みことばは霊であり生命だからである。このことばを喜んで受け入れ、理解し、それに従って生き他人の手本とな

り、最後まで耐え忍ぶ者はだれも、三位一体の神に祝福されるように！アーメン」
「弟子の足を洗う」謙遜と愛、従順というフランシスコの信念が息づいている。この従順がフランシスコの平和の源の一つになっている。あらゆる我意の完全な放棄、あらゆる命令や暴力への完全な従順、「あなたの右の頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。」（ルカによる福音書6章②⑨）

フランシスコは平和を実現するために三つのことを説き自ら率先して台上の手本を示した。

①従順、②祈り、③普段の喜び（これらについては次号で記します）

社会問題に関して世俗の権力を持つ行政官（市町村長、執政官、裁判官、校長等）に対しても手紙を書いている「忙しさにまぎれて唯一の大事を忘れないように」勧めている。

1224年の出来事（2） 聖痕を受ける

(1) ラ・ヴェルナ山に向う

1224年8月健康を回復したフランシスコはリエティの谷を出てラ・ヴェルナ山に向かった。8月15日の聖母マリアの被昇天祭から9月29日の大天使ミカエルの祝日までの40日間の断食をし、静かに祈り、瞑想に浸りたいと思ったのである。そこには1213年オルランド伯爵によって寄贈された土地があった。険しい岩の多い1200mの山で静かで祈りに適した所であった。その途上でフランシスコの体力は衰弱し弟子たちは農家にいって師を乗せるろばを借りにいった。その農民は彼らを励まし、さらに「あなたを信用している人が沢山いるのですから、大事になさいよ」といって山頂までの案内も引き受けてくれた。フランシスコはひざまずいてこの農民の足に接吻して戒めを感謝した。山の中腹で一息いれていると「たちまち小鳥の群れがやって来て、楽しくさえずり、羽ばたきしながら挨拶した。聖者の頭にとまるものもいれば、肩や膝や手にとまるものもあった。フランシスコはこの不思議を見て、『愛する兄弟たちよ、わたしたちの兄弟小鳥がこんなに歓迎する、この静かな山に住むのは、きっとわたしたちの主イエス・キリストのみ旨にかないますよ』と言った。オルランド伯爵はこれを聞いて喜び翌日には大勢の家来を連れてフランシスコを訪問し援助を申し出た。オルランド伯爵の親切に甘えて忠誠を誓ったわたしたちのご主人清貧を傷つけないように弟子たちを戒めることを忘れなかった。フランシスコは弟子たちから離れて暗い湿った岩穴がある固い岩を寝床として「祈り」に専念した。近づけたのは兄弟レオーネだけ、しかも一日2回の時間まで決められて、祈りの妨げになるものを一切遮断した。

祈ることはたくさんありすぎた。自分の健康から兄弟たちの肉体と魂の平安、組織をめぐる争い、罪の告白と悔い改めの祈り。

(2) 9月14日未明の祈り。

断食のあける朝の日の出を待って顔を東の方に向け、フランシスコは腕を広げて手を上げて「おお、主イエス・キリストよ、死ぬ前に、二つのお恵みをくださるようお願いします。

第一のお恵みは、おお、やさしいイエスよ、あなたが御苦難で耐えぬかれた苦痛を、わたしの心と体でできるだけ感じることです（キリストの苦難）

第二のお恵みは、神の子であるあなたの燃え立つ愛、あなたを駆り立てわたしたち罪人のために苦しむようにした大いなる愛を、わたしの胸の中でできるだけ感じることです（キリストの無限の愛と喜び）」

(3) 聖痕を受ける

長いこと祈っている間に、神がこの二つの願いをききとどけて、感じることを許してくれるという確信を得た。そして幻影が現れるのを見た。不思議な幻影が消えるとフランシスコの胸には、激しい炎と神への生き生きとした愛が残り、キリストの苦難の不思議な疵痕が付いた

「釘のようなものがすぐ手足に現れだし、その真ん中を貫いているように見えた。釘の頭は手のひらと足の甲に出ていて、釘の先は手の裏と足の裏に出ていた。（中略）おなじように右胸のわきに、槍で突いた跡が現れた。傷痕はないが、赤く血がにじんでいて、そこからはしばし聖フランシスコの血が流れ出て、彼の衣をズボンをぬらした（p338）

フランシスコは身に起こった不思議を長いこと隠しておけなかった。傷がひどくて痛み他人の手をかりなければ日常生活がおくれなかった。傷口には包帯を巻かねばならなかったし、歩くことも困難であった。弟子たちが包帯を替えたが「フランシスコがキリストとともに苦しもうと思った木曜日から日曜の朝までは」何もさせなかった。この苦しみの中でフランシスコは「いただいたお恵みへの感謝のために」という聖痕の讃歌を詩っている。

(4) 聖痕の讃歌

おんみは聖く、主なる神、神々の天主、奇跡を行う唯一の神

おんみは強く、偉大で、いと高い。おんみは全能天地の聖い父にして王

おんみは三位一体、主、神々の天主。

おんみは善、全き善、最高の善、主、生ける真の神

おんみは愛、智慧、謙遜、忍耐。

おんみは美、安全、平和、喜び

おんみはわれらの希望、正義と節度、われらのあらゆる富

おんみは柔和、われらの保護者、防衛者、護衛。われらの避難所と力

おんみはわれらの信、望、愛、おんみはわれらの魂の甘美
おんみは無限の善、大きい偉大な主なる神、
全能、善、慈悲、われらの救い主

(5)ラ・ヴェルナ山からポルチウンクラに向う

この後ラ・ヴェルナ山に2週間滞在した後9月30日、山を下りてポルチウンクラに向かう。惜別のことは弟子たちへの戒めと激励、聖なる山、寝床にした固い岩への感謝、兄弟と呼んだ鷹（朝の目覚めを知らせてくれた）への感謝に満ちている。その道中はどこでも凱旋の行列のように民衆に囲まれポルチウンクラの到着したのは11月半ばであった。そして、若いころの熱心さが戻りすぐ布教に出た。またハンセン病患者の所に行き、みずから重傷の患者の体を洗い清め、傷を癒やすという奇跡を起こした。

フランシスコの改心はハンセン病患者への接触から始まった

その後間もなく肉体は更に衰弱し、弟子のエリアは師の命は後2年だと告げて医者にかかるように勧めたが、神のおぼしめしのままになることを願いサン・ダミアノ修道院に近くに小屋を建てクララの看病を受けることになった

1225年の出来事

(1)太陽の賛歌①

1225年の夏、目もくらむほどのイタリアの夏の太陽は眼病を患っているフランシスコには厳しく、全く目が見えなくなった。そのうえ野ねずみの群れに悩まされ、眠っているフランシスコの顔の上も走り回ったので夜も昼も休むことができなかった。こんなに哀れで惨めだったことは以前にはなかったという。睡眠不足、衰弱の中で、フランシスコの輝かしい傑作「太陽の讃歌」が作られ始めたのである。

太陽の賛歌①

いと高い、全能の、善い主よ

賛美と栄光と誉れと、すべての祝福はあなたのものです。

いと高いお方よ

このすべては、あなただけのものです。

だれもあなたの御名を、呼ぶにふさわしくありません。

私の主よ、あなたは称えられますように

すべてのあなたの造られたものと共に

わけても兄弟である太陽と共に。

太陽は昼であり、あなたは、太陽で私たちを照らします
太陽は美しく、偉大な光彩を放って耀き、
いと高いお方よ、あなたの似姿を宿しています。

私の主よ、あなたは称えられますように
姉妹である月と星によって。
あなたは、月と星を、天に明るく、貴く、美しく造られました。

私の主よ、あなたは称えられますように
兄弟である風によって。
また、空気と雲と晴天と、あらゆる天候によって。
あなたは、これらによって、
ご自分のつくられたものを、扶け、養われます

私の主よ、あなたは称えられますように
姉妹である水によって。
水は有益で謙遜、貴く、純潔です。

私の主よ、あなたは称えられますように
兄弟である火によって。
あなたは、火で夜を照らされます。
火は美しく、快活で、たくましく、力があります。

私の主よ、あなたは称えられますように
私たちの姉妹である、母なる大地によって。
大地は、私たちを養い、治め
さまざまな実と色とりどりの草花を生み出します。

（川下 勝著「アッシジのフランシスコ」清水書院刊より引用）

この「太陽の賛歌」はラテン語ではなくフランシスコが日常話していた地方のことばで書かれている。ダンテよりも100年前である

(2)目に灼熱の手術を受ける

その後、ウゴリーノ枢機卿や弟子たちやクララの勧めでリエティに滞在していた教皇付きけの医師にかかることを決意して骨を皮ばかりになった肉体、その痛みを抱

えてサン・ダミアノを出発した。聖痕があっても歩けるような靴をクララが作ってくれていたのので歩いて出発した。

治療は大胆で両こめかみを灼熱した鉄で焼灼するという、当時では有効とされていたが、これは特に狂犬病に用いられたものだと言われている。医者が焼灼を始めると弟子たちは肉が焼ける音を聞いて逃げてしまった。フランシスコは手術の後「焼き方が足りなかったら、もう一度やいてください。いっこうに痛みませんから」と言っただけだった。。道中あたかも聖遺物であるこのように熱狂的に庶民が集まってきた。灼熱は効果がなかったの、更に他の医師に診てもらい耳を通して目を治療した。リエティの谷で夏から翌年の春までウゴリーノ枢機卿の保護もとで療養した。この医師の勧めがあつてこの冬を温暖なシエナに転地した。

1226年の出来事

(1)シエナの遺言

4月にはシエナに移っていた。「ある夕方、彼は胃の病が原因で吐き気を覚えた。そして激しく力んだため嘔吐し、それが夜中から朝にかけて続いた。衰弱と痛みのために今にも死にそうに思われた。弟子たちの要望でシエナの遺言がなされた。

「書き記してください。現在この修道会にいる兄弟たち、そして夜の終わりまでに、入ってくる兄弟たちみんなをわたしが祝福すると。わたしは、衰弱し、病苦のために話すことができませんが、現在と将来の兄弟たちに、わたしの望みと、わたしの意向を、短く三つのことばでしめします。わたしの思い出、祝福、遺言を大切にし、今までわたしがみんなを愛したように、そして今も愛しているように、互いに愛し合いなさい。そして、わたしたちの貴婦人である聖なる「貧しさ」を常に愛し、守りなさい。聖なる母である教会の高位聖職者と聖職者には常に忠実に服従しなさい」(シエナの遺言と言われている)

(2)アッシジの司教館に移る

フランシスコのいまわの唯一の願いは、アッシジをもう一度見ることだった。少し回復したところで弟子のエリアに付き添われてアッシジに向かう。(その途中最初の休憩をコルトーナでとる) エリアはその願いを叶えるためにある工夫を必要とした。既にフランシスコは万人憧れの聖遺物になるはずであるので、ペルージャ市民は出発を邪魔するだろうと恐れ、重体の師を回り道をしてアッシジの護衛をつけて帰郷させた。夕方アッシジに着いた病人は司教館に寝かされ、周囲には見張りが立てられた。

太陽の賛歌②

ここでフランシスコが知ったことはある事柄に対して市長と司教が公然と対立し、司教が市長を破門すれば、市長は全市民に司教との商取引を禁じるということだった。6月のことであつた。病に伏すフランシスコは「だれもここで仲直りさせないのは、神の僕であるわたしたちの大きな恥です」と弟子たちに言って、前に作つてあつた太陽の歌に新たに二節を作詞し、市長に司教館に来るように使いをやり、司教にもお出でを願わせ、招かれた二人は司教館広場に集まつた。この場所は19年前フランシスコが父に衣服を返したところであつた。すると小さい兄弟たち二人が歩み出て、まず、既に出来上がつていた太陽の歌を歌い、それから新しい二節を歌つた。

「たたえられよ、わが主よ、おんみへの愛ゆえに許し
病と苦しみに耐える者によって、
じつと平和を守る者は幸いである、
おんみに、いと高い者よ、栄冠をさずけられようから」（永野藤夫訳）

川下 勝訳

私の主よ、あなたは称えられますように。
あなたの愛のゆえに赦し、病と苦難を、耐え忍ぶ人によって。
平和な心で耐え忍ぶ人々は、幸いです。
その人たちは、いと高いお方よ、あなたから 栄冠を受けるからです

二人の兄弟たちが歌っている間、一同は聖堂で福音書が読まれるときのように手を組んで立っていた。歌が終わりになり、最後の句が歌われると、市長は一步前に出て、ガイド司教の前にひれ伏していった。

「わたしたちの主イエス・キリストとその僕フランシスコへの愛のために、あなたを心から許し、あなたのお気に召すようにしたいと思います！」すると司教はかがんで敵を助け起こし、抱いて接吻していった

「職務がら、謙遜で平和を愛するのが、わたしにはふさわしい。それなのに生まれつき短気だから、このわたしを大目にみてほしい」

兄弟たちは司教館に入り、フランシスコが太陽の歌で平和を乱す悪霊に勝ったことを報告した。

太陽の賛歌③

フランシスコは8月のある日、もう長く生きられないことを感じて医者に見せた。はじめ医者は「医師に許されている嘘」をついて彼を慰めたがフランシスコは「本

当のことを言って下さい」と迫った。医師ははっきり言った「わたしの見たてでは9月末か10月初めまで生きられます」

フランシスコは一瞬黙っていたが、両手を上げて「では歓迎します。姉妹死よ！」このことばが彼の心の「詩の泉」を掘り当てたように、彼は太陽の歌にこの最後の節を書き加えた

「ほめられよ、わが主よ、わたしたちの姉妹である肉体の死によって生ある者はだれもそれを逃れられない。

大罪の状態で死ぬ者は災いである。

おんみのいと高いみ旨を見出すものはさいわいである、第二の死にそこなわれることはないから」（永野藤夫訳）

川下 勝訳

私の主よ、あなたは称えられますように、

私たちの姉妹である、肉体の死によって。

生きているものはだれでも、死から逃れることはできません。

大罪のうちに死ぬ者は不幸です。

あなたの、いと聖なるみ旨のうちにいる人々は幸いです。

第二の死が、その人々を、そこなうことはないからです。

私の主をほめ、称えなさい。

主に感謝し、深くへりくだって、主に仕えなさい。

その時からフランシスコは気分が向いたときにはこの歌を歌ってくれるように望んだ。そして臨終の床から全生涯を回顧し哀歓の情をもって改心当初のさわやかな一時を詳しく述べ、又、短い強烈な文章で忠実な弟子たちの将来を戒めた。その長い遺言の中でも「主がわたしにお示しになった挨拶は主があなたに平和をお与えになりますように」が中核を占めている。

(3)ポルチウンクラに戻る

フランシスコは最後はポルチウンクラに戻ることを望みガイド司教の指導でそれは進められた。弟子たちが病人を司教館から運び出したときには長い行列ができていた。アッシジとポルチウンクラの中程にハンセン死病院、サン・サルヴァトーレ・デッレ・パレティに着いた。聖フランシスコの改宗の原点の思い出に富むこの場所に着くと病人は担架を下ろすように命じた。「さあ、わたしの顔をアッシジの方へ向けてください」と言った。一瞬深い沈黙が生じたが、病人は兄弟たちに助け起こされた。そして懐かしい故郷の風景と空をなかば見えない目で見渡した。「わた

しはここを出て行き、この土地とこの市に死ぬために戻ってきた」と無言で眺めたことだろう。その風景は今もアッシジに残っている。

(4) フランシスコの最後の晩餐

病人はポルチウクラ礼拝堂の数歩後ろの小屋に寝かされた。

10月1日その日は木曜日であった。フランシスコは弟子たちを集めてひとり一人を祝福した。それから力尽きて眠った。然し翌日金曜日の早朝ひどい痛みに目覚めた。弟子たちは皆ずっと集まっていた。彼はまだ木曜日だと思っていた。そして、主が弟子たちと最後の晩餐をともにした日だと思って、彼はパンを持ってこさせ、それを祝して裂き皆に分け与えた（パンを裂く力もなかった。弟子が手伝った）

「さあ、聖書をもってきて、聖木曜日の福音を呼んでください！」と彼は言った。誰かが「きょうは木曜日ではありません」と言った。「木曜日だと思っていたのに！」これがフランシスコの答えであった。聖書が持ってこられ、夜が明け初める頃、フランシスコの臨終の床の上に聖書のことばが響いた。そこには彼の全生涯をすべての教えがこめられていた。ヨハネによる福音書13章①～⑮

10月3日土曜日医師が来ると、永遠の生命への門はいよいよいつ開かれるのかと彼は尋ねた。弟子たちに灰を頭に播いてくれとそして修道服を脱がせ粗末な下着姿にするように頼んだ。そしてむき出しの大地に横たえてもらった。「裸で裸のキリストのあとに従った」

夕方彼は異常な力で歌い出した。詩編第142篇であった。「声をあげ、主に向かって叫び、声をあげ、主に向かって憐れみを求めよう。（中略）あなたはわたしの避けどころ、命あるものの地で、わたしの分となってくださるかた」フランシスコが祈っているうちに、庵の中は真っ暗になった。彼の声がやんだとき、死の静けさが忍びこんだ。この声がもう破ることのない静けさが。アッシジのフランシスコの唇は永久に閉じた。フランシスコは歌いながら永遠の中へ入っていった。その瞬間、庵の上に、不意に高いさえずりが響いた。最後の挨拶を告げたのは聖フランシスコのよき友、”ひばり” だった。

ヒバリとスズメ

「フランシスコは自分を、ちいさなみすばらしいスズメだと思っていました。質素な茶色の服を着て、裏町のバルコニーにとまり、貧しい人や病気の人、不幸せな人びとに、チッチッと愛の歌をうたうスズメ。自分もスズメのようでありたい、と願いました。その一方、空高く、自由に飛びまわるヒバリは、祝福の翼にのって、天へのぼる復活のキリストの姿に思え、自分も、いつかヒバリになることを夢みしました」藤城清治著「アッシジの聖フランシスコ」女子パウロ会刊2016年6月



小さなあとがき

聖者の伝記を読み解くのは、私には容易なことではありませんでした。独学は独善に陥ります。4回の連載でかなりの誤りに気づきました。次号で訂正します。大学でのゼミナールの尊さを実感しています。あまりにも愚かで浅学であることをさらけ出しています。伝記は複数読み行間を埋めなければ真実に近づけないことも学びました。勇気を頂き、次なる挑戦、聖フランシスコを尊敬しておられた坂村真民先生の今までに書かれていない真実、沈黙と記憶のはざまに迫りたいと内心が踊っています。